

- 問1 弥生時代、ムラ同士の争いに備え、集落の周囲に深い濠（ほり）や柵を巡らせた集落が見られるようになりました。このような特徴を持つ集落の名称として正しいものを、次の中から選びなさい。（2022年 沖縄県公立入試 類似）
- 高床倉庫
 - 門前町
 - 環濠集落
 - 竪穴住居
- 問2 弥生時代の集落において、収穫した稲を保存するために造られた「高床倉庫」について、床を高く設計した主な目的として最も適切な説明を選びなさい。（2021年 岡山県公立入試 類似）
- 夏の暑さをしのぐために、地面に深い穴を掘って室内の温度を一定に保つため。
 - 床下の通気性を高めて湿気を防ぐとともに、ネズミなどの害虫が侵入するのを防ぐため。
 - 洪水による浸水を防ぐために、海岸沿いの低湿地に集落の全ての建物を配置する必要があったため。
 - 敵からの攻撃をいち早く発見するために、建物全体を物見櫓（ものみやぐら）として活用するため。
- 問3 日本の「奴国」が中国の後漢から金印を授かった紀元1世紀前後の、日本と世界の情勢について述べた文として、背景や関連性が正しいものはどれですか。（2019年 神奈川県公立入試 類似）
- 奴国の王は、インダス文明との交易を有利に進めるために後漢へ使者を送り、同時期に中国では仏教が日本へ伝来した。
 - 奴国の王は、織田信長が行った楽市・楽座のような自由貿易を求めて後漢と交渉し、同時期のヨーロッパでは大航海時代が幕を開けていた。
 - 奴国の王は、イスラム教の影響を受けた後漢の制度を取り入れるために金印を求め、パレスチナでは十字軍の遠征が始まっていた。
 - 奴国の王は、中国の皇帝との外交関係を築くことで自国の地位を高めようとし、同じ頃の世界ではローマ帝国の繁栄とともにキリスト教が成立し始めていた。
- 問4 佐賀県に位置する吉野ヶ里遺跡は、周囲を深い堀や土塁で囲んだ大規模な環濠集落である。このような集落が造られた当時の社会背景を説明したものとして、最も適切なものはどれか。（2023年 佐賀県公立入試 類似）
- 大陸から仏教が伝来し、その寺院を保護するために宗教的な儀礼として堀を巡らせる必要があった。
 - ナウマン象などの大型の獲物を効率よく捕獲するための罠として、村の周囲に深い溝を掘る必要があった。
 - 稲作によって収穫物の蓄えや土地・水をめぐる争いが集落間で発生したため、外敵から守る必要があった。
 - 氷河期が終わり海面の上昇が激しくなったため、集落が水没しないような高い防波堤を築く必要があった。
- 問5 弥生時代の社会において、大陸から伝わった「青銅器」と「鉄器」の使い分けに関する説明として、最も適切なものはどれですか。（2016年 長崎県公立入試 類似）
- 青銅器は主に通貨として流通し、鉄器は主に古墳の副葬品としてのみ使われた。
 - 青銅器は書院造のような武家の住居を飾る装飾品として用いられた。
 - 青銅器は祭りの道具として用いられ、鉄器は工具や農具として用いられた。
 - 青銅器は鋭い切れ味を活かして農具に、鉄器は祭りの楽器に用いられた。
- 問6 弥生時代の遺跡からは、青銅器と鉄器という二種類の金属器が発見されています。鉄器が農具の刃先として普及したことが、当時の社会に与えた影響として最も適切な説明を選びなさい。（2023年 大阪府公立入試 類似）
- 農具が重くなったことで、小規模な家族単位での農業が不可能になった。
 - 石器に比べて加工が簡単だったため、各家庭で容易に自給できるようになった。
 - 青銅器よりも希少価値が高かったため、王の権威を示すための宝物としてのみ扱われた。
 - 土地の開墾や耕作が容易になり、食料である米の生産力が向上した。
- 問7 弥生時代に大陸から稲作が伝わると、収穫のための道具として磨製石器の一種が広く使われるようになりました。中央に2つの小さな穴が開いた半月形の形状をしており、稲の穂先のみを摘み取るために使用されたこの道具の名称を選びなさい。（2024年 秋田県公立入試 類似）
- 鉄鎌
 - 尖頭器
 - 磨製石斧
 - 石包丁
- 問8 1世紀に倭の奴国の王が中国の後漢へ使者を送り、光武帝から金印を授かった背景として、当時の小国の王たちの目的を説明したものとして最も適切なものはどれですか。（2023年 大阪府公立入試 類似）
- 仏教などの新しい宗教を中国から導入し、国民の精神的な団結を図るため。
 - 中国からの軍事支援を直接受け、近隣諸国を武力で一気に統一しようと考えたため。
 - 遣隋使や遣唐使のように、進んだ律令制度を学び取り、日本独自の憲法を制定するため。
 - 中国の皇帝から地位を認められることで、自国の権威を高め、周囲の国々に対して有利に立つため。
- 問9 1世紀半ばの日本（倭）において、九州にあった奴国の王が中国の王朝に使者を送り、皇帝から金印を授けられたという記録が中国の歴史書に残されています。このとき、奴国の王に金印を授けた中国の王朝として正しいものを次の中から選びなさい。（2026年 山口県公立入試 類似）
- 漢
 - 秦
 - 隋
 - 魏
- 問10 朝鮮半島から稲作が伝わった弥生時代の生活様式について述べた文章のうち、収穫した稲の保管方法に関する説明として正しいものはどれですか。（2023年 茨城県公立入試 類似）
- 獲った獲物を燻製にするために、洞窟の奥深くに納めた。
 - 大きな石を組み合わせて作った石舞台古墳の中に保管した。
 - 湿気を防ぎネズミなどの害を避けるために作られた高床倉庫に納めた。
 - 地面を掘り下げて床を作った竪穴住居の中に保管した。
- 問11 佐賀県に位置する吉野ヶ里遺跡は、集落の周囲に深い濠（ほり）や土塁を巡らせた「環濠集落」の代表例として知られています。このような大規模な防衛施設を持つ集落が弥生時代に造られるようになった社会的背景として、最も適切な説明はどれか、選びなさい。（2020年 和歌山県公立入試 類似）
- 本格的な稲作が始まり、土地や水をめぐる集落間の争いが激しくなったため
 - 頻発する大規模な洪水や高潮から、住居や高床倉庫の浸水を防ぐ必要があったため
 - 仏教の伝来にともない、寺院を中心とした聖域を保護する必要が生じたため
 - 狩猟や採集の効率を上げるために、獲物となる動物を追い込む囲いが必要だったため
- 問12 弥生時代に大陸から伝わった金属器のうち、銅剣や銅矛、銅鐸などの青銅器は、時代が進むにつれて本来の武器としての役割から変化し、どのような目的で用いられるようになりましたか。（2020年 沖縄県公立入試 類似）
- 仏教の教えを広めるための儀式用具
 - 豊作などを祈るための祭りの道具
 - 巨大な古墳を築造するための土木用具
 - 定期市で品物を交換するための貨幣

答え合わせ・解説

問1	答え 3 環濠集落	稲作が広まった弥生時代には、土地や水をめぐる争い（戦争）が頻繁に起こるようになりました。集落を守るために、周囲に深い「濠（ほり）」を掘り、その内側に「柵」を立てるといった防御設備を持つ「環濠集落」が各地で作られました。
問2	答え 2 床下の通気性を高めて湿気を防ぐとともに、ネズミなどの害虫が侵入するのを防ぐため。	稲作が本格化した弥生時代には、収穫物を長期間保存する技術が不可欠となりました。高床倉庫は、床を高くすることで風通しを良くして湿気による稲の腐敗を防ぎ、さらに柱の上の部分に「ねずみ返し」と呼ばれる板を取り付けることで、食料を食い荒らすネズミの侵入を防ぐ工夫が施されていました。
問3	答え 4 奴国の王は、中国の皇帝との外交関係を築くことで自国の地位を高めようとし、同じ頃の世界ではローマ帝国の繁栄とともにキリスト教が成立し始めていた。	当時の小国の王が中国（後漢）の皇帝に使者を送り金印を授かったのは、中国の権威を背景に周辺諸国に対して自国の地位を有利にする目的がありました。この紀元1世紀という時期は、西洋においてはローマ帝国の統一とイエスによるキリスト教の創始という、その後の世界史に大きな影響を与える出来事が重なっています。インダス文明は古代、イスラム教や十字軍、大航海時代などはより後世の出来事であり、奴国の時代背景とは一致しません。
問4	答え 3 稲作によって収穫物の蓄えや土地・水をめぐる争いが集落間で発生したため、外敵から守る必要があった。	弥生時代に稲作が始まると、余剰生産物の貯蔵や、稲作に不可欠な水田・用水をめぐって集落間で利害対立が生じ、戦争が起こるようになりました。吉野ヶ里遺跡に見られる環濠や土塁、物見櫓は、敵の侵入を防ぎ、村を守るための防御施設として機能していました。
問5	答え 3 青銅器は祭りの道具として用いられ、鉄器は工具や農具として用いられた。	弥生時代には青銅器と鉄器がほぼ同時に伝わりました。鉄は非常に硬いため、木を加工する工具や、土を掘り返す農具、実戦用の武器などの実用的な用途に主に使われました。一方で青銅は鉄よりも柔らかいため、銅鐸、銅剣、銅矛などのように、神を祀る儀式や祭りの道具として象徴的に使われるようになりました。
問6	答え 4 土地の開墾や耕作が容易になり、食料である米の生産力が向上した。	鉄は青銅よりも非常に硬いため、木製の農具の先端に装着することで、硬い土を掘り起こしたり森林を切り拓いたりすることが可能になりました。これにより耕作面積が拡大し、農業の生産性が飛躍的に高まりました。一方、祭祀用として重宝されたのは、鉄器ではなく主に青銅器（銅鏡や銅鐸など）の方でした。
問7	答え 4 石包丁	弥生時代に稲作が本格化する中で、収穫用具として石包丁が誕生しました。石を磨いて作られた磨製石器で、穴に紐を通して指に固定し、手のひらで包むようにして稲の穂を一つひとつ摘み取る「穂首刈り（ほくびがり）」が行われました。のちの時代に鉄製の鎌が普及するまでは、この石包丁が収穫の主役でした。
問8	答え 4 中国の皇帝から地位を認められることで、自国の権威を高め、周囲の国々に対して有利に立つため。	当時の日本（倭）は100余りの小国に分かれて対立しており、奴国のような小国の王は、強大な勢力を持つ中国（後漢）の皇帝に朝貢（貢物を届けること）して「臣下」としての形をとることで、自らの支配の正当性や地位を国際的に裏付けてもらおうとしました。福岡県の志賀島で見つかった金印は、このような当時の国際関係（冊封体制）の実態を象徴する資料です。
問9	答え 1 漢	中国の歴史書である『後漢書』東夷伝には、西暦57年に倭の奴国の王が使者を送り、光武帝から印綬（金印）を授かったことが記されています。この金印は、江戸時代に福岡県の志賀島で発見された「漢委奴国王」の文字が刻まれたものと一致すると考えられています。設問にある1世紀という時期は、中国では漢（後漢）の時代にあたります。
問10	答え 3 湿気を防ぎネズミなどの害を避けるために作られた高床倉庫に納めた。	稲作が普及すると、収穫した食料を長期保存する必要が生じました。地面から床を高く浮かせることで通気性を良くし、湿気による腐敗を防ぐとともに、ネズミなどの小動物の侵入を防ぐ「ねずみ返し」などの工夫がなされました。
問11	答え 1 本格的な稲作が始まり、土地や水をめぐる集落間の争いが激しくなったため	弥生時代に大陸から本格的な水稻耕作が伝わると、収穫物の余剰を蓄える「富」が生まれ、それを奪い合う争いが始まりました。吉野ヶ里遺跡に見られる深い濠や逆茂木（さかもぎ）、物見やぐらなどの施設は、敵の侵入を防ぎ、共同体の財産や命を守るために発達した軍事・防衛的な工夫です。
問12	答え 2 豊作などを祈るための祭りの道具	大陸から稲作の技術とともに伝わった青銅器は、当初は武器としての形を持っていましたが、次第に大型化・薄型化していきました。これは実戦で使うためではなく、村のまとまりを強めるための祭りや儀式において、神を祀るための「祭具（祭礼具）」として重宝されるようになったためです。